

令和 3 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12349

研究課題名(和文)近世ヨーロッパにおける教育と「イソップ集」展開に関する文献学的総合研究

研究課題名(英文)A comprehensive philological study on development of Aesop's fable collections and education in early modern Europe

研究代表者

吉川 斉 (Yoshikawa, Hitoshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・助教

研究者番号：60773851

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：イソップ集は地域・時代・言語を超えて、古代から現代まで多層的に広がる対象である。一方、各時代各地域のイソップ集の展開については、個々のイソップ集の同時代的な位置づけを考慮しつつ、改めて捉え直す必要がある。本研究では、近世ヨーロッパにおける教育との関係をふまえて、近世以降に印刷刊行されたイソップ集の様態を検討し、近世・近代のヨーロッパおよび日本におけるイソップ集展開について考察して、とりわけ日本への移入の在り方の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の研究成果を含む単著を出版し(『「イソップ寓話」の形成と展開 古代ギリシアから近代日本へ』知泉書館、2020年)、日本のイソップ研究の現状に厚みを加えることができた。なかでも、近代日本におけるイソップ集の移入や修身教育との関わりについては、西洋古典・西洋文化の日本への移入例としても興味深いものといえる。そしてまた、そこに近世以来の西洋のイソップ集の在り方の影響を確認できたことは、現代につながる日本社会の成り立ちを考えるうえでも有意義であると思われる。

研究成果の概要(英文)：Aesop's fable collections are a multi-layered object across regions, periods and languages, from ancient times to the present day. It is necessary to reconsider the development and diffusion of Aesop's fable collections in each era and each region, taking into account the contemporary position of each one. In this study, we examined the status of Aesop's fable collections printed and published after the early modern period, based on the relationship with education in early modern Europe. We considered the development and diffusion of them in Europe and especially in Japan, and clarified some aspects of their transfer to Japan in particular.

研究分野：西洋古典学

キーワード：イソップ 古典受容

1. 研究開始当初の背景

近世ヨーロッパでは、15世紀後半の印刷本イソップ集刊行開始以来、各国語への展開も著しい。その状況は16世紀に入っても続き、イソップ集はさらに爆発的にその数を増やす。そして、イエズス会の宣教師とともに世界へと持ち出され、日本で『エソポのハbras』(1593年)が刊行されるに至る。これら近世ヨーロッパに広がるイソップ集については、1470年代刊行のシュタインヘーヴェル集の影響が広く議論され、たとえば『エソポのハbras』やその後の『伊曾保物語』の原典としてシュタインヘーヴェル集の系統が指摘されている。また、近年は『伊曾保物語』とスペイン語版イソップ集との関係が取り沙汰されるなど、当時のイソップ集に関して議論が進展する一方で、16世紀の状況はまだまだ詳らかではない。

ところで、申請者は、「教育」と「イソップ寓話」の関わりの重要性を認識していた。その観点で見直すと、たとえば16世紀初頭に古代の修辞学教育に由来する『修辞学初等教程』*Progymnasmata*が西洋で再び脚光を浴びており、それに伴いイソップ集を取り巻く状況に変化が見られる。しかし、こうした点について、先行研究では注目されていない。そのため、とりわけ当時の教育との関係を軸に、個々のイソップ集の同時代的な位置づけを考慮しつつ、近世におけるイソップ集の展開を改めて描き直す必要があるように思われる状況があった。

2. 研究の目的

本研究で扱うイソップ集は地域・時代・言語を超えて、古代から現代まで多層的に広がる対象である。一方、各時代各地域のイソップ集の展開については、個々のイソップ集の同時代的な位置づけを考慮しつつ、改めて捉え直す必要がある。本研究では、近世ヨーロッパにおける教育との関係をふまえて、とくに15世紀後半から16世紀に刊行されたイソップ集の様態を検討することで、近世におけるイソップ集展開について新たな知見を得ることを当初の目的としていた。

そのうえで、具体的に、

- (1) 近世ヨーロッパにおいて出版されたイソップ集の実態はいかなるものであったか
 - (2) 当時の教育の状況およびそこにおけるイソップ集の位置づけはいかなるものであったか
 - (3) 16世紀の日本で刊行された『エソポのハbras』の原典に何を想定しうるか
- という相互に関連しあう3つの問いの解明を中心的課題として設定した。

3. 研究の方法

研究の目的に鑑みて、以下のような方法を設定して研究を進めた(便宜的に番号を振ったが、並行的な部分もあり、また、結果として細かい部分までのすべてを実施できたわけではない)。細目はともあれ、研究課題名のとおり、基本的にはテキストの在り方への注目が中心である。

(1) 15世紀後半から16世紀に登場した印刷本イソップ集について調査する。イソップ集は当時から数多く印刷され、現在電子公開済みのイソップ集も多岐にわたるため、当面は電子公開資料を中心に調査を進める。

(2) イソップ集の内容を具体的に比較検討する。イソップ集に含まれる個々の話に注目し、テキストや内容を比較検討して、イソップ集相互の関係を明らかにする。とくに古代から多数のイソップ集に共通する話を対象に、内容の異同を詳細に分析し、挿絵等にも注目しながら、相互の関係を考察する。

(3) 16世紀前後の西洋における教育及び『修辞学初等教程』について、関連資料の収集確認を進め、教育における『修辞学初等教程』の位置づけやその影響を考察、さらにはイソップ集を含めた具体的な教育法などを検討する。

(4) 近世ヨーロッパにおけるイソップ集の在り方を教育との関係の中で再検討する。この時期になぜ多種多様なイソップ集が生み出されるに至ったかなど、多角的な考察を行う。

(5) 発展的取り組みとして、『エソポのハbras』の原典考察を行う。当時の西洋や日本における『エソポのハbras』の位置づけを検討する。イエズス会との関係、持ち込み可能と考えられるイソップ集など、ここまでの研究成果を活用して『エソポのハbras』の背景を確認する。その上で、『エソポのハbras』に含まれる話の内容分析を行い、おそらく複数あると想定されるその原典について検討を試みる。

4. 研究成果

本研究課題では、16世紀を主眼としつつも、近世を軸として(半ば寄り道的に)その前後の時期も検討の対象に含めたため、実際には古代から近代にいたる、より広範な時期・地域のイソップ集の展開を扱うことになった。ゆるやかに関連しあう研究成果は以下の通りである。

(1) 本研究課題期間中のもっとも大きな成果としては、古代ギリシア・ローマにおける「イソップ」の話の集合形成の在り方、古代から近代日本までのイソップ集の展開、近世・近代ヨーロッパや近代日本におけるイソップ受容などについて、従前の研究をふまえて幅広く検討を行い、それらの成果をまとめて公刊した単著が挙げられる(『「イソップ寓話」の形成と展開 古代ギリシアから近代日本へ』知泉書館、2020年)。

近世ヨーロッパと関わる点では、16世紀以来、ギリシア語原典からの翻訳ではない、大学の修辞学教師によるラテン語イソップ集が複数編纂されている。その中には、版を重ねて広く普及し、17世紀以降にも形を変えて学校教育のラテン語教科書として用いられた例も見受けられる。一方、たとえば17世紀末に英国で刊行され普及したレストランジ集(英語本)編纂の動機は、その種のラテン語教科書の一書に起因する。レストランジ集は明治期日本で翻訳イソップ集の原本のひとつとして用いられており、大きな流れとして、近世ヨーロッパのイソップ集の影響が、近代日本にも及んでいたことを確認できる。

また、近代日本におけるイソップ集の展開においては、英語版からの翻訳が大きな役割を果たすが、その基点が幕末に始まる日本の洋学教育に関与し、さらに修身教育や英語教育との関わりを通じてイソップ集が日本社会に普及したことも見えてきた。そのなかで、近代の日本においては、イソップ集の対象がより低年齢化したようにも見受けられるが、近世ヨーロッパに限らず、イソップ集展開と教育の関係の重要性を改めて認識するに至った。

(2) 各国への展開を確認するために、中近世のフランス、近世以降の英国に関して検討した。

フランスでは、『マリーのイゾペ』のように中世から独自性をもって話が改変される例が見受けられ、その傾向はシュタインハーヴェル集の翻訳とされるマシヨー本にも現れ、16世紀の豊富なイソップ集や、17世紀のラ・フォンテーヌらまで繋がっている。この成果については、(「Sur la variété des fables d'Ésope en français tradition et originalité (フランス語で書かれた様々な『イソップ寓話』について 伝統とオリジナリティー)」(招待講演(日本語)、2019年3月9日、日仏ギリシャ・ローマ学会、東京)として発表した。

一方、マシヨー本を英訳したカクストン本に始まる英国での展開については、近世以来の英語版独自の伝統が形成されており、改めて古典古代が意識される近代においても、(あるいはそれと認識されずに)その伝統が受け継がれていることを確認できた。近代の英語版イソップ集は同時代の日本で翻訳されており、近代の日本におけるイソップ受容を考える上でも重要である。この点については、「19世紀英国における翻訳イソップ集に関する一考察 「蛙と牛」にみる母蛙の怒りを中心として」(『津田塾大学紀要』51, 2019年, pp.273-295)として発表した。

また、近世以来の各種英語版イソップ集については、「肉をくわえた犬」の話を主な対象として、挿絵との関連性も含めて、その変容の在り方を考察して、2019年8月8日に高校生向けに講演を行った(「英語で書かれた「イソップ寓話」について」)。本文テキストと挿絵の関係性は、中世写本の時代から挿絵が豊かに描かれるイソップ集の場合、興味深い主題である。本研究課題では扱いきれなかったが、今後検討する必要はあるだろう。

(3) 近世刊行のイソップ集について、1505年刊行アルドゥス本の冒頭にアプトニオス版『修辞学初等教程』のmythosの項目が掲載された意義に注目した。1480年刊行のアククルシウス本は、アルドゥス本同様にギリシア語版各話でepimythionと表記して教訓部を導入する。これは、アプトニオス版『修辞学初等教程』以来、話の教訓部を示す用語であるが、序文やラテン語部分等を見る限り、アククルシウスはその点を意識していない。一方、アルドゥスは『修辞学初等教程』の項目を配置することでepimythionの意味を明示する。同時に、彼はそのラテン語訳に、プリスキアヌスのラテン語訳『修辞学初等教程』に倣い、近世ラテン語訳イソップ集として初めてAffabulatioを用いた。アルドゥスはイソップ集を『修辞学初等教程』の枠組みに位置づけて提示したが、その後刊行されたイソップ集に鑑みて、西洋近世のイソップ集の在り方に一定の影響を及ぼしたと推測できる。そうした流れのなかで16世紀に編纂されたラテン語イソップ集に由来するラテン語教科書が、前述したレストランジ集の動機と関わる一書である。

(4) 16世紀末にイエズス会士により日本で翻訳刊行された『エソポのハプラス』および17世紀初頭に刊行された『伊曾保物語』をおもな対象として、近世・近代の西洋から日本へのイソップ集の移入やその在り方について検討を行った。それらの成果の一部は、「「イソップ」の渡来と帰化」(葛西康徳、ヴァネッサ・カッツアート編『古典の挑戦』所収、知泉書館、2021年)にまとめた。

16世紀半ばに日本へキリスト教を伝えたイエズス会は、日本で教育活動を展開し、当時西洋にあったと思いきラテン語イソップ集も持ち込んだ。イソップ集はとくに日本語学習教材として日本語に翻訳され、1593年には『エソポのハプラス』が印刷刊行された。一方、『伊曾保物語』は、17世紀初めに仮名草子として刊行され、『エソポのハプラス』とも内容が一部重なる。1608年までにイエズス会士ジョアン・ロドリゲスが編纂した『日本大文典』は、『エソポのハプラス』『伊曾保物語』由来の文例を含み、『伊曾保物語』とイエズス会の関わりも確認できる。しかし、『エソポのハプラス』が当時のキリスト教禁教政策の進展とともに姿を消す一方で、『伊曾保物語』は、『エソポのハプラス』とは異なる方針のもとに刊行され、結果として江戸時代唯一の日本語翻訳イソップ集となった。両者とも近世日本で刊行された類似の日本語翻訳イソップ集で

あるが、その在り方の相違には注意を要する。

なお、『エソポの八プラス』の原典は詳らかにはできなかった。16世紀のイソップ集では、ラテン語系統の話やギリシア語系統の話、あるいは当時創作・改変された話などが多層的に拡がり、個々の話のレベルで当時のイエズス会士が参照可能なものとして、多様なヴァリエーションの話が混在していたことが分かってきた。『エソポの八プラス』の場合、翻訳時に独自の改変も加えられており、原典は同定困難な可能性もあるが、その探索は引き続き検討課題である。

以上のとおり、古代ギリシアから近代日本までを概括する(1)の成果により、日本におけるイソップ研究の進展に貢献することができたと考える。とりわけ近代日本におけるイソップ受容の在り方について、渡部温『通俗伊蘇普物語』とその周辺を詳述し、明治期日本におけるイソップの拡がりとその背景を示した。一方、当初の予定よりも広い範囲を検討することとなり、結果として近世ヨーロッパに関わる部分は密度が低くなったが、幅広い時代と地域を扱い、(4)において『エソポの八プラス』『伊曾保物語』も含めて日本のイソップ受容を再検討することで、近世と近代の断絶と接続について、その輪郭を確認することができた。今後の展望としては、これまで得られた成果をふまえて改めて近世ヨーロッパを軸とするイソップ集の展開に注目するとともに、本研究課題期間中に準備をすすめるながらも実現できなかった各種電子データの公開をめざしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉川 斉	4. 巻 51
2. 論文標題 19世紀英国における翻訳イソップ集に関する一考察 「蛙と牛」にみる母蛙の怒りを中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 津田塾大学紀要	6. 最初と最後の頁 273-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉川 斉
2. 発表標題 英語で書かれた「イソップ寓話」について
3. 学会等名 2019年度東京大学文学部次世代人文学開発センター高大接続特別セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川 斉
2. 発表標題 フランス語で書かれた様々な『イソップ寓話』について 伝統とオリジナリティー
3. 学会等名 日仏ギリシャ・ローマ学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川 斉
2. 発表標題 イソップの受容と日本の近代初等教育
3. 学会等名 東京大学大学院人文社会研究科多分野交流演習（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉川 齊	4. 発行年 2020年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 374
3. 書名 「イソップ寓話」の形成と展開 古代ギリシアから近代日本へ	

1. 著者名 葛西康徳、ヴァネッサ・カッター (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 592
3. 書名 古典の挑戦 古代ギリシア・ローマ研究ナビ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------